

制作地で見ると、関東では埼玉、中部では長野、山梨、東北では岩手、福島、山形、近畿では京都などに、繰り返し訪れている。また、季節は4月をピークに1月末から5月にかけてと、11月をピークとする9月から12月に最も旺盛に制作している。

制作地と場所を照らし合わせると、秋には比較的各所へ訪れているのだが、春の動向は独自のルートがつくられていた。それは、1月末の早春に埼玉を中心にした武蔵野へ赴き、続いて長野郊外で春先にひっそりと咲く杏の花を見おさめてから、4月下旬から東北へ向かうものであった。

変わりゆくもの変わらぬもの

向井潤吉が戦後間もなく民家を描き始めてから40年の間、それは日本が大きく、そして劇的に変容していく時代と重なる。

武蔵野は、70年代に上越へ向けて高速道路が建設され、コンクリートの直線が田園を貫き、埼玉県の県央部から秩父にかけては、森が切り拓かれて無数のゴルフ場が建設され、大きな森林は姿を消して行った。

東北も鉄道や道路の発展によって高速化が進み、それはいまま山間部を縫うように延伸している。

いずれも、我々の生活を簡便にするための開発であるが、それと引き換えに、受け継がれてきた土地を人為的に変形させてしまうことにもつながっている。自然が何万年もかけて作り上げた地形を、人間の都合で一瞬のうちに変容させてしまう。風景とはこんなにも脆く、容易に変えられるものなのだろうか。

向井潤吉も、40年間で多くの風景の変容を目の当たりにしてきた。自然と共生する民家を描く画家にとって、新建材で開発されていく町や村の変容は、より切実に対峙しなければならない現実との闘いであつたらう。しかし、向井潤吉は自らのペースで歩み、時代に消されぬうちに残された民家をできる限り描き続けた。

向井潤吉が繰り返し、同じ時期に同じ場所へ取材に赴いていても、刻々と民家をとりまく環境は変化していった。同時代に共存する民家と新建材の町並み。この変化を画家はいかに見つけていたのであろうか。

「人間が喜ぶ自然・風景、それはそこに住む人たちがそれを造り出す以外にはない、言い換えると、そこに住んでいる人たちの心になつたものをつくることによっておおぜいの人の心もかなうものが生まれてくるものである。」(宮本常一『宮本常一著作集第43巻』)

この民俗学者・宮本常一の視線は、向井潤吉のそれと重なるように思える。向井潤吉は風景をただ鑑賞として眺めていたのではなく、その土地の人々が、日々つくりあげるくらしの「かたち」を見守り、その力強い生命力を讃えていたと思えてならない。

繰り返し土地を訪れ、じつと向井潤吉は風景に身をゆだね、変わるもの、変わらぬものすべてを受け止め、季節に応じる風土の姿を、絵筆とともに味わっていたのではないだろうか。

「向井潤吉が愛でた季節
早春の武蔵野と遅春の東北」展
2007年4月1日(日)～7月22日(日)

発行：世田谷美術館分館向井潤吉アトリエ館
2007年5月